

## 日子坐王(ひこいまずのきみ)の伝説

日子坐王とは崇神天皇の弟にあたり、四道将軍として丹波に派遣された丹波道主命(たにはみちぬしのみこと)の父にあたる。当地方最古の伝説として日子坐王の土蜘蛛退治物語があり、「丹後風土記残缺(たごふどきざんけつ)」に収められている。



「陸耳御笠が逃げ込んだ大江山」(福知山市大江町より)

日子坐王の土蜘蛛退治の概要は「丹後風土記残缺」によると、崇神天皇の時、青葉山中に陸耳御笠(くがみのみかさ)・匹女(ひきめ)を首領とする土蜘蛛がいて人民を苦しめたので、日子坐王が勅命を受けて討ったというもので、その戦いとかかわり、鳴生(成生)、爾保崎(匂ヶ崎)、志託(志高)、血原(千原)、楯原(蓼原)、川守(河守)などの地名縁起が語られている。

このなかで、川守郷(福知山市大江町河守)にかかる記述が最も詳しい。これによると青葉山から陸耳御笠らを追い落とした日子坐王は、陸耳御笠を追って蟻道郷(福知山市大江町有路)の血原(千原)にきてここで匹女を殺した。この戦いであたり一面が血の原となったのでここを血原と呼ぶようになった。陸耳御笠は降伏しようとしたが、日本得玉命が下流からやってきたので、陸耳御笠は急に川をこえて逃げた。そこで日子坐王の軍勢は楯をならべ川を守った。これが楯原(蓼原)川守(河守)の地名の起こりである。陸耳御笠は由良川を下流へ敗走した。このとき一艘の舟が川を下ってきたので、その船に乗り陸耳御笠を追い、由良港へきたがここで見失った。そこで石を拾って占ったところ、陸耳御笠は、与謝の大山(大江山)へ逃げ込んだことがわかった。そこを石占(石浦)といい、この舟は楯原(蓼原)に祀った。これが船戸神であるという内容である。

ちなみに「丹後風土記残缺」とは、奈良時代に国別に編纂された地誌である「丹後風土記」の一部が、京都北白川家に伝わっていたものを十五世紀に僧智海が筆写したものとされる。